

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 6 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22500561

研究課題名(和文) アダプテッド・スポーツ教育のための教材開発

研究課題名(英文) Development of the teaching materials in adapted sports education

研究代表者

齊藤 まゆみ (SAITO, Mayumi)

筑波大学・体育系・准教授

研究者番号：00223339

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円、(間接経費) 990,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、特別支援教育制度において、アダプテッド・スポーツ教育を推進するために必要となる体育の方向性を明らかにすることを目標とし、現段階では個別事例として取り組まれているアダプテッド・スポーツ実践例の体系化を通して、アダプテッド・スポーツ教育としての新しい教材を開発することが目的として実施した。その結果、教材開発のために必要な項目として、課題の設定、集団づくり、ルール用具の工夫、支援方法が抽出された。体育教師は、体育の専門性だけでなく、体育授業で支援が必要な児童生徒をインクルージョンするための方法とアダプテッド体育として個に応じた工夫と創造ができることを具備する必要性が示された。

研究成果の概要(英文)：School Education Law was partially amended and enacted in FY 2007 in Japan. However the status of inclusion for students with special educational needs in general physical education is still a developing practice. The purpose of our study is to clarify the present status of students with special educational needs with the goal to develop teaching materials for adapted physical education. For this, we developed a database by collecting information about the physical education practice. The results indicate that PE teachers should acquire a viewpoint of Adapted physical activity (APA) to achieve Inclusive Physical Education. For development of teaching materials on each educational field, the PE teachers must have experience with APA and recognize its concepts. Moreover, having the viewpoint of APA is important for both students with disabilities and PE teachers.

研究分野：アダプテッド・スポーツ科学

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・スポーツ科学

キーワード：体育 アダプテッド体育 インクルーシブ体育 アダプテッド・スポーツ

1. 研究開始当初の背景

2007 年度より特別支援教育制度が完全実施となり、小・中学校に在籍する特別支援が必要な児童生徒の増加が見込まれるなか、障害のある児童・生徒の体育授業の実態を把握するために、全国の小中学校を対象に、学校におけるアダプテッド・スポーツ教育の実施状況に関する調査研究を実施した。その結果から、教員はアダプテッド・スポーツに関する知識が必要であると考えているが、現状としてこれらの情報が不足していることが示された。同時に、積極的に関わりたくない、専門性のある教員が担当すればよいという当該教員以外の関心の低さも課題として指摘された。さらに、教員のニーズとして、必要な情報が手軽に入手できることや研修を必要としていることが明らかとなった。アダプテッド・スポーツ教育を推進するためにも、必要な情報が利用しやすい形で提供され、活用されるシステムを構築する必要がある。そのためには、障害のある児童生徒をインクルージョンした体育の方向性を示し、モデルとなる教材、指導法を提示していくことが必要であると考えた。

2. 研究の目的

特別支援教育制度において、アダプテッド・スポーツ教育を推進するために必要となる体育の方向性を明らかにすることが本研究の目標である。その目標を達成するために、現段階では個別事例として取り組まれているアダプテッド・スポーツ実践例を収集し、共通する因子を抽出し、体系化することを試みる。このことから、特別支援教育制度における体育の方向性を検討し、アダプテッド・スポーツ教育としての新しい教材を提案する。これをもとに、既成の概念にとらわれないアダプテッド・スポーツ教育としての新しい教材を開発することが本研究の目的である。

3. 研究の方法

(1) アダプテッド・スポーツ教材開発のためのカテゴリ

体育授業において支援が必要な生徒が1年間に実施した体育の内容、実施形態と配慮・工夫についてのアンケート調査を行い、教員が意識している配慮・工夫について得られたキーワードから4項目を抽出した。

次に、項目をもとに授業の観察評価を行い、「体育の成立、障害の理解、協力・連携」の視点から現状と課題を分析し特別支援教育制度において体育の教員が具備すべきことについて検討した。

事例

対象：小学校5年生の児童19名(知的障害児1名)が参加する小学校体育授業でスポーツ教育モデルを実施した。知的障害児が所

属するグループの児童7名(知的障害児1名、他児6名)を観察対象とし、学級担任(教員歴8年、社会科が専科)と特別支援学級担任(教員歴26年、国語が専科)のチームティーチングで行われ器械運動(跳び箱)であった。授業を実施するにあたり、学級担任には実験開始前にスポーツ教育モデルに関する内容の講義と授業計画の作成についてのガイダンスを行なった。作成された授業計画をもとに、5週間にわたって授業が実施され、フィールドノーツとDVDをもとに区間記録法による観察記録を作成した。

事例

対象：中学校に在籍経験があり、現在特別支援学校に通っている肢体不自由の生徒と卒業生10名を対象に半構造化面接のインタビュー調査と4件法の質問紙調査をおこない、中学校の体育授業内容について、「授業形態」、「移動方法」、「参加状況」、「体育授業やスポーツのイメージ」、「中学校の体育授業で困っていたこと」、「質問紙調査の内容について」、「成績・評価」、「中学校の体育授業をより良くするための方法」、「その他」の項目についての回答を分析した。

(2) 教材開発と体育の方向性

アダプテッド・スポーツ教材の体系化のためにアダプテッド・スポーツ教育実践例をカテゴリごとに分類し分析した。

4. 研究成果

(1) アダプテッド・スポーツ教材開発のためのカテゴリ

国内外のアダプテッド・スポーツ教育実践例の資料収集をおこない、教育現場における現状把握をした。次に、アダプテッド・スポーツ教材の体系化を目指して、小・中学校のアダプテッド・スポーツ教育実践例の観察評価をおこなった。

研究協力の了解が得られた公立小・中学校において、質問紙、授業観察記録やビデオ撮影、ヒアリングなどによる資料収集を実施した。小学校では、スポーツ教育の実践モデルに着目し、スポーツ教育モデル(ダリル・シーデントップ、2003)を用いた体育授業における観察評価をした。また、中学校の事例では、それらを中学校学習指導要領保健体育編より、体育分野の領域や内容をもとに検討した結果、アダプテッド・スポーツ教材として必要なカテゴリとして、課題の設定、集団づくり、ルール用具の工夫、支援方法が抽出され、それぞれのカテゴリごとにキーワードが抽出された。次に、キーワードをもとに、陸上競技(短距離走、長距離走、ハードル)、球技(ゴール型：サッカー、バスケットボール、ネット型：バレーボール)の授業を観察記録したところ、設定したカテゴリとキーワードの分類で概ね記録可能であることが示された(図1)。

事例

スポーツ教育モデルのインクルーシブ体育における可能性を探るべく、運動技能、メンバーとの関わり、チームに対するアイデンティティに着目し、以下のことが分かった。知的障害児を含む7名中5名に動技能の向上が見られ、メンバーとの関わり直後に技能が向上していることが観察された。また、運動技能の向上は競技性や快感情と関連していることが示唆された。

メンバーとの関わりはチームへの所属、自立性、競技性によって促されていることが示唆され、様々な方法によって児童間の関わりが行われていた。またメンバーに対する関わりの変化も観察され、メンバーとの関わりは快感情を生み出しており、チームに対するアイデンティティに変化があったことが示唆された。これらの結果から、スポーツ教育モデルは、障がいがある児童と障がいがない児童ともに学習成果があり、インクルーシブ体育の実践方法として有効的な手段であることが示唆された。

事例

中学校の体育授業のイメージと体育授業の参加方法をクロス集計したところ、否定的なイメージの対象者は、見学や別の場所で自習など、身体運動を行わない参加方法が多い傾向があった。一方で、肯定的なイメージの対象者は1つの種目に対して、別課題だけではなく、障害のない生徒と一緒に活動する場面や同じ場所で活動する場面を含む複数の方法で参加している傾向があった。

中学校当時は体育授業に対し否定的にとらえていた対象者は、「成績が悪いのは当たり前」、「はじめから一緒に出来るなんて思っていない」などのあきらめや割り切りを感じていたが、高校でアダプテッド体育を経験することによって、「当時もやり方次第では参加できたかもしれない」という意識変化が生じていた。また、「参加するための工夫をしてもらえた」など中学校で肯定的にとらえていた対象者でも、高校の体育で今までとは違う、より積極的な参加を経験したことで、「当時も練習だけでなく試合に出たかった」、「グループ活動に参加したかった」などへ意識が変化していた。これらのことから、インクルーシブ体育を担当する教師はアダプテッド・スポーツの視点を持つ必要があり、また、生徒自身もアダプテッド・スポーツを知る必要があると考えられた。

(2) 教材開発と体育の方向性

特別支援教育制度における体育の方向性について、A体育授業にインクルージョンするために必要なアダプテーションとBアダプテッド体育のための教材開発という2つの視点が必要であることが示された。

そこで、A体育授業にインクルージョンす

るために必要なアダプテーションとして、スポーツ教育モデル(事例他)ペア学習などの教授モデルを用いた事例的検討と中学校の体育授業を経験した障害のある生徒(肢体不自由、聴覚障害)を対象とした当事者視点のインタビュー調査結果(事例他)から今後の体育の方向性を検討した。

項目	内容	キーワード	
10: 課題の設定(27)	11: 変更しない(4)	グループ課題(2) 課題解決型(1) 成功体験(4)	同じ(1) 到達目標(1) 医学的配慮(1)
	12: 変更する(24)	スモールステップ(3) 距離(3) 回数(2) 技術(2) 個別課題設定(2) タイム(2)	競争(1) 協力(1) 交流目的(1)
20: 場の設定(11)	21: 共有(11)	グループ(7) 個に応じた役割(1) 学び合い(1)	能力別編成(1) リーダー(1)
	22: 一部共有		
30: ルールや用具の工夫(18)	31: ルールの工夫(7)	距離 基準 人数 代走	高さ 大きさ 得点方法
	32: 用具の工夫(11)	重さ(2) 形状(2) 硬度(2) 材質(2)	手触り 手作り 大きさ
40: 支援の方法(27)	41: 情報提示(6)	色 ライン サイン/ゼスチャー	ピブスの活用 絵カード 文字ボード
	42: 協力連携(10)	TT(5) 仲のいい友達(3)	特別支援担任(2)
	43: 障害の理解(11)	参加を促す(3) 個別指導(2) 最後まで待つ(2)	特別支援担任(2) 必要に応じた安静(2)

項目・内容の前にある数字はコード、()は件数を表す

図1 教材開発のためのカテゴリー

次に、フラッグフットボールをもとにアダプテッドフラッグフットボールを試作した。試作教材を用いて、体育教員を希望する大学生を対象とした模擬活動を実施し、評価の指標を作成した。この結果は、「障がい者もできるフラッグフットボールのゲーム特性と安全性」(大学体育研究 34,47-52,2012)で発表した。

(3) 研修内容の検討

これまでの結果から、アダプテッド・スポーツ教育を推進し、教材を活用するためには保健体育教師はアダプテッド体育を知る必要があることが示された。そのために、アダプテッド体育に関するワークショップを開催した。本研究で明らかとなったA通常体育にインクルージョンするために必要なアダプテーションとBアダプテッド体育のための教材開発について、先進事例として資料収集を行ったアメリカのアダプテッド体育専門家を招き、共同でワークショップを実施した。また、現職教員対象公開講座「さまざまな障害のこどもたちの体育指導」を開催し、教育現場への涵養をはかることとした。このことより、現在の教育制度においては、アダ

プテッド・スポーツ教育のための教材開発の重要性と保健体育教員として具備すべき視点(図2)について示唆することができた。

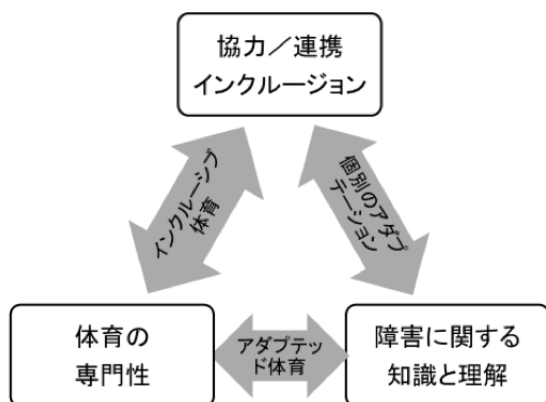


図2 保健体育教師が具備すべき視点

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 8 件)

齊藤まゆみ, 犀川桜: 聴覚障がい者を対象としたスポーツ教育のための教材開発, バイオメカニズム学会誌, 査読無, 38(2), 111-116, 2014

松元剛, 松尾博一, 加藤達郎, 齊藤まゆみ: 小学校6年生におけるフラッグフットボールの作戦図に関する特徴, コーチング学研究, 査読有, 27(1), 117-124, 2013

加藤達郎, 齊藤まゆみ, 松元剛: 障がい者もできるフラッグフットボールのゲーム特性と安全性, 大学体育研究, 査読有, 34, 47-52, 2012. <http://hdl.handle.net/2241/117185>

〔学会発表〕(計 12 件)

齊藤まゆみ, 澤江幸則: アダプテッド体育・スポーツの視点をもった指導者を育てるために. 第34回医療体育研究会/第17回アダプテッド体育・スポーツ学会第15回合同大会, 2013.12.8, 東北文化学園大学(宮城県)

齊藤まゆみ, 澤江幸則, 松元剛: 特別支援教育制度における体育の現状からみたアダプテッド・スポーツ教育の課題. 日本体育学会第64回大会, 2013.8.28, 立命館大学びわこ・くさつキャンパス(滋賀県)

齊藤まゆみ, 加藤達郎, 澤江幸則: 特別支援学級に在籍する児童が参加する体育に関する事例研究-スポーツ教育モデルを用いた体育の事例を通して-. 日本体育学会第63回大会, 2012.8.22, 東海大学湘南キャンパス(神奈川県)

Mayumi SAITO, Yukinori SAWAE, Tatsuro KATO: Status of adapted physical education in junior high schools in Japan. 12th Asian Society of Adapted Physical Education and Exercise Symposium, 2012.8.10, Hong Kong

China

齊藤まゆみ, 澤江幸則, 松元剛: アダプテッド・スポーツ教育のための教材開発. 日本体育学会第62回大会, 2011.9.26, 鹿屋体育大学(鹿児島県)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

齊藤 まゆみ (SAITO, Mayumi)

筑波大学・体育系・准教授

研究者番号: 00223339

(2) 研究分担者

松元 剛 (MATSUMOTO, Tsuyoshi)

筑波大学・体育系・准教授

研究者番号: 90209643

澤江 幸則 (SAWAE, Yukinori)

筑波大学・体育系・准教授

研究者番号: 20364846